

宝の山 みんなのものに

三宅 一郎さん



世論調査は手間もお金もかかる。一度やつてそれっきりではもったいない。データを集め、みんなで利用できる図書館みたいなものはないか。

日本における実証的な政治学の先駆者、三宅一郎(77)がそう思ったのは京大人文科学研究所にいた30代後半だ。

米国留学中、世論調査を使った投票行動の分析をみて「自分でもやってみよう」。京都府宇治市で調べた。投票が政党支持の影響を強く受けていることを実証データで明らかにした。

全国でも調べたい。だが研究費がない。三宅は総理府の世論調査に目をつける。「データを見せてください」「無理です。でもアメリカでなら手に入りますよ」。なぜアメリカ？

国内では非公開のデータを、総理府は米国の世論研究機関がつくった資料保存のデータアーカイブ、「ローパーセンター」には送っていたのだ。

三宅が訪ねると、世界中から1万件以上の調査データが集まっていた。日本のものを収めた磁気テープもある。だが、元のデータをテープに移す作業がずさんで、中身がめっちゃくちゃになったものも多かった。

「せつかくの宝の山なのに」。三宅は磁気テープを持ち帰る。神戸大で授業の合間、修復にくりくんだ。つじつまが合わないものは推理を働かせ、「まるで暗号の解読でした」。



蒲島郁夫さん



佐藤博樹さん



谷岡一郎さん

約180件の修復に5年。人知れず面倒な作業に没頭した。「日本にもデータアーカイブができるよ、役立つと思うんです」。先見の明である。

そんな三宅を応援したのが、蒲島郁夫(61)。貧しい農家に生まれ、高卒後、農協に勤めた。米国に渡り、豚の精子を研究した後、政治学に転向。そこで三宅と出会う。

2人が車でローパーセンターに行つたときのこと。蒲島は誤つて高速道路の反対車線に入つてしまう。「すぐ側道に逃げたが、なんとそこに警察署が。日本語で『英語、分かりません』。それで許してくれた」

学者になつた蒲島は、実証政治学の気鋭が集う「シヴァイアサングループ」に加わる。95年、活動の一環として、三宅のデータをもとに政治分野のアーカイブをつくった。東大教授をへて今春から熊本県知事。

東大社会科学研究所教授の佐藤博樹(55)は98年、政治に限らず、様々な分野のアーカイブを立ち上げた。佐藤の専門は労働や人事管理。多くの調査を手がけたが、忙しさに追われ、納得いくまで分析しきれない。

「データを公開すれば、他の人にも分析してもらえと思うんです」

共鳴した研究者たちから1千件以上のデータが寄せられる。もちろん三宅からも。「委託を

お願いしたら、快諾してくださつた。敬意をこめて検索の目印に、三宅先生の頭文字の『M』をつけています」と佐藤。

大阪商業大学長の谷岡一郎(52)も佐藤のアーカイブに協力するひとりだ。専門は犯罪学。20代で米国に留学し、統計調査を学ぶ。帰国して驚いた。

「データを思い込み、他人に検証をさせない独りよがりの調査がまかり通つていました」

そんなもの、社会を映す鏡にならない。著書『社会調査のウソ』がベストセラーに。日本人の意識をさぐる「日本版総合的社会調査」は広く使われている。「アーカイブのおかげ、最近 データをオープンにという機運がみえてきました」

日本で一番多く世論調査をしているのは政府や大学などではなく、地方自治体だ。関西学院大で社会学を教える大谷信介(52)は01年、大阪府の各自治体による市民意識調査について学生と一緒に調べた。

調査をやりつばなし。データの分析も保存も、ろくにされていないところが自立つた。「調査の大切さが分かっている。データベース化し、政策に役立てるべきです。市民もアクセスできるようにしたい」

世論調査はみんなのもの。データをおおいに活用しよう。なにする「民の心」が詰まっているのだから。(吉田真文)



ゼミで学生と語る大谷信介さん(中央)